

コミュニケーションのためのライティング

—海外大学生との電子メール交換—

小 林 ひろ江

総合科学部

はじめに

コンピュータの普及とともに、インターネットや電子メールの利用は目覚ましく、特に、電子メールは伝達の速さと手軽さから私たちの日常生活に欠かせないコミュニケーションの手段となっている。これと同時に、電子メールを情報交換ばかりでなく、外国語学習に役立てようとする動きが米国などで1980年代から本格的に始まり、現在では、電子メール交換を導入した外国語授業が世界各地で急速に増えている (Warschauer, 1995)。

1998年、コミュニケーションのための英語ライティング能力の育成を目的として、1年生を対象とした「ライティング I」と未修了生を対象としたオープンクラス「ライティング I」の授業にて、海外の大学生との電子メール交換を実践した。この二つのクラスでの実践に基づき、本稿は、電子メール交換について次の2点を報告したい：(1)電子メール交換のための準備と実施、(2)アンケート調査に基づく学生の反応。

I. 電子メール交換の準備

1) 対象学生

前期に開講された「ライティング I」を受講したのは、教育学部英語教育学専攻の1年生、31名であり、多くの学生(31名中24名)にとってコンピュータ操作は初めての体験であった。一方、後期のオープンクラス「ライティング I」は2年生(23名)、3年生(4名)、4年生(2名)の計29名の学生から構成され、出身学部は工学部、法学部、教育学部などさまざまであった。未修了生の多く(28名中21名)は日本語による電子メール交換をすでに経験しており、基本的なコンピュータ操作の仕方は学んでいた。

2) 準備

a) コンピュータの基本操作

最初は、マウスを使ったコンピュータの基本操作、ローマ字入力によるキーボード打ち練習、Judora 設定、テキストの作成と保存の仕方など、いわゆるコンピュータ・リテラシーの習得に授業時間が充てられた。経験者の少ない1年生クラスでは、最初の3回の授業を使い、こうしたコンピュータ操作の仕方や級友にメールを送信する練習を行った。経験者の多い未修了生クラスでは、コンピュータ操作の練習は比較的円滑に進んだが、メール送信・受信にトラブルが生じた。これは、入学した際に登録したパスワードが7ヵ月間使用されていなかったために、自動的にキャンセルされていたことやアドレスを情報教育センター (riise) と総合情報センター (ipc) の両方にもっていたため混乱が生じたことが原因であった。こうしたトラブルの発生原因を明らかにすることとその対処に時間がかかった。¹

b) 電子メール交換の目的

電子メール交換を開始する前に、メール交換の目的として、次の2点を挙げた：(1)メール交換

を通して相手の文化や生活習慣を知ること、(2)言語や文化が異なる人に英語で自分の考えや意見をわかりやすく伝える努力をすること。メールの書き方については、“Dear ~”で始まり、“Sincerely”や“Best regards,”で終わる手紙の形式を紹介し、日本人ではないキーパル（メールのパートナー）に対していかにメールを書くかについては以下の2点を強調した。

1. 読み手にわかるようにできるだけ具体的な情報を含める。

例1 “My name is Sakiko Kato. I am a student at Hiroshima University.”

この英文では、日本人の名前に慣れていない読み手にとって名前からこの学生が女性であると判断することは難しい。“student.”の前に“female”を付け加え、女性であることを示す。また、相手の性別がわからない時は、“I guess you are a male student. If I am wrong, please correct me..”とか“Are you a male student?.”と尋ねて確かめるとよい。

例2 “Hiroshima University is one of the major universities in Japan.”

学生は、この英文によって広島大学について十分説明したつもりであるが、相手は広島大学が日本のどこに位置するのかわからない。“in Japan.”のあとに、“which is located in the western part of Japan.”という地理的な情報を付け加える。日本の地名、建物や習慣等について説明する際には、情報量が多くなっても、読み手にわかる説明を心がける。

2. 最初はできるだけ共通の話題（例、学生生活）をとりあげ、この話題について情報交換や意見交換をする。自分の話題を提供するだけでなく、相手はどんなことに興味があるのか、大学生としてどんな生活を送っているのか、などの質問をすると、相手も返事を書きたくなる。

読み手が日本人でない場合、当り前の前提とか背景知識は共有できない。しかし海外との交流経験のない学生にとってこれはどんなことなのか実感できにくい。前提が共有できないことをわかってもらうために、級友に送信した「自己紹介」と海外のキーパルにあてて送信する「自己紹介」の違いを上記の(1)の点から明かにして示した。学生には、メールを書くとき内容を明瞭に伝える工夫をするように指示した。

c) パートナー校の選択とキーパルとのマッチング

最初のパートナー校であるニューヨーク市立コミュニティカレッジは、アメリカ人の知人を通して電子メール交換を取り決めた。その後は、IECC (Intercultural E-mail Classroom Connection) に掲示された「キーパル求む」の案内を利用した。²パートナー校を選ぶときは、メール交換可能の期間とお互いの学生の英語能力の2点を考慮した。手順としては、「キーパル求む」の案内を出した相手校の教師と連絡をとり、お互いに情報を交換し合し、条件があれば、メール交換に合意する。この方法で、2回目はパートナー校としてマクギル大学（カナダ）と、3回目はバルセロナ大学（スペイン）とメール交換を取り決めた。後期の授業でも、同様な方法でパートナー校を探したが、適当な大学が見当たらなかったため、カリフォルニア州のサンホセ市にある成人教育センターと連絡をとり、メール交換をすることにした。

ニューヨークの学生は移民の子弟か本人自身が移民であり、コンピュータについての授業を受

けていた。カナダの学生は大学で英語を第二言語として勉強しており、出身はアジア系、スペイン系など多様であったが、スペインの学生はすべてスペイン人で、日本人学生と同様に英語を外国語として学ぶ大学生であった。それぞれの相手校の教師によると、学生の英語能力は、中級から上級レベルである。一方、アメリカのサンホセ成人教育センターで学ぶ学生は、移民が多く、英語を学習しているが、英語能力は初級から中級レベルであると推測された。前期は、相手校の教育プログラムの都合で、メールの交換はそれぞれ2週間から3週間という比較的短い期間であったが、後期は、現在（12月2日）までに5週間ほど続き、まだ進行中である。

キーパルとのマッチングは試行錯誤しながらさまざまな方法を試みた。第1回目は、相手校から電子メール交換希望者の名簿を入手し、性別に基づき教師が女性同士、男性同士の組み合わせを行った。第2回目は、相手校のクラス名簿から日本人学生に各自のパートナーを選ばせ、第3回目は、性別、年齢、趣味についての情報をつけ加えたクラス名簿を相手校と交換し、その情報に基づき日本人学生がパートナーを選んだ。後期は、情報を交換する余裕がなかったため、前期の第2回目と同じく、相手校から送られた名簿から学生に直接パートナーを選ばせた。

II. メール交換実施

1年生を対象にしたクラスでは、キーパルのマッチングやメールのチェックは授業中に行ったが、メールを書いて送信することは教室の外で行うように指示した。（学生はマルチメディア外国語自習室や大学内でのコンピュータ使用可能な場所からメールを送信した）。このクラスではメール交換が軌道にのった時点で、授業の中心をプロセスアプローチによる作文指導に移した。一方、未修了生を対象にしたクラスでは、電子メール交換を授業の中心に据え、メールの内容となる作文（「自己紹介」、「趣味について」、「自分が好きな場所」、「日本のお正月」など）を授業の課題として取り組み、教師が作文をチェックしたのち、学生がそれぞれのキーパルに送信した。また、前期のクラスと同じように、教室外でのメール交換も奨励した。どちらのグループにも電子メール交換に関して問題が生じた場合には、教師に電子メールで直接に連絡するように指示した。

以下の表1と表2は、学生の報告に基づき、各大学の学生とのメールを交換した学生数とメール交換回数のパーセントを示したものである。

表1 メール交換学生数と回数：1年生クラス

	N.Y. 市立コミュニティ カレッジ (アメリカ)	マクギル大学 (カナダ)	バルセロナ大学 (スペイン)
メール期間	5月	6月	7月
発信 (本校より)	25名	16名	20名
受信 (相手校から)	13名 (52%)	15名 (94%)	19名 (95%)
メール交換回数			
1回のみ	8名 (32%)	3名 (19%)	7名 (35%)
2回のみ	2名 (8%)	5名 (31%)	5名 (25%)
3回以上	3名 (12%)	7名 (44%)	7名 (35%)

ニューヨーク市立コミュニティカレッジの学生へは、当クラスから25名がメールを送信したが、返信は52%の13名に止まり、その後のメール交換回数も低い割合であった。しかし学生の中には、7回もキーパルとメールを交換し、交換期間の終了後も、手紙で文通を継続したいと申し出られた学生もいた。一方、マクギル大学とバルセロナ大学からのメール返信率は94%、95%と高く、

その後も2回、3回とメールの交換が続いた。後者の場合、返信率が高かった理由としては、メール交換をお互いの授業で課題として義務づけたことと教師同士が直接連絡しあい、メール交換の進行について情報を交換しあったことが挙げらる。一学期間を通して、本学の31名の学生うち、一人を除く、30名がメール交換を経験した。メールを送信した平均回数は一人5回、受信は平均4回であった。

表2 メール交換学生数と回数：オープンクラス³

サンホセ成人教育センター (アメリカ)	
メール期間	10～11月
発信 (本校より)	27名
受信 (相手校から)	22名 (82%)
メール交換回数	
1回のみ	8名 (39%)
2回のみ	7名 (26%)
3回以上	7名 (26%)

サンホセ成人教育センターとは、現在まだメール交換が進行中であるが、5週間の期間中、メールを送信した27名のうち、82%の学生(22名)が返事を受け取った。その後も、2回、3回と継続してメール交換を行っているが、本校、相手校ともに学生の英語レベルに合わせて授業のペースが緩やかなため、これまでに送信した平均回数は、一人につき2.5回、相手からのメール受信の回数は2.1回にとどまっている。

III. メール交換についての学生の反応

前期、後期、それぞれのクラスで電子メール交換に参加した学生に記述式アンケート用紙を配布し、回答してもらった。6つの質問項目の内容は同じであるが、1年生対象のアンケートには、電子メールと英語ライティングの関係に関する項目を2つ追加した。回答者数は、前期クラスが31名、後期クラスが27名である。以下ではアンケート調査の結果の一部と考察について述べる。

アンケート結果

電子メール交換を通して得たものは何か(複数回答, 1年生; 未修了生)

1) 異文化理解/交流について (15名; 5名)

- ・外国人から見た日本のイメージを知ることができた。
- ・スペインのことについて少しはわかるようになった。
- ・外国の文化に少し触れることができた。
- ・アメリカでは55才の学生もいることを学んだ。
- ・自己紹介や日本の紹介を英語でする難しさと楽しさを感じた。
- ・遠く離れた場所の人と意見を交換することにより、自分の世界が広がったような気がした。
- ・他の国の人に親近感をもつことができた。

2) 英語学習について (5名, 2名)

- ・手紙での会話で、生きた英語にふれることができた。
- ・英文を書くうまさがあがったと思った。

- ・構文とかを覚えているだけでは実際に英語を使って会話 (exchange) するとき、役に立たないということに気付いた。
- ・E-mail の書式やあいさつの仕方を習得し、英作のスピードが上がりました。

3) コミュニケーションの楽しさや難しさ (11名, 7名)

- ・E-mail では、日常の面白かったことやちょっとした行事、文化のことなどリアルタイムの感情とか出せばいい。
- ・格式ばらずに友達のように英語のやりとりをするという経験ができてよかった。
- ・ふだんの chat 感覚で英語を楽しめる。
- ・外国人と e-mail する楽しさを知った。
- ・おしゃべりは難しい。
- ・自分がじかに相手とコミュニケーションしたいと感じているか表現しないとイケない。
- ・書き方が相手によってかなり異なってくる気がした。
- ・非常に難しい。こっちは英語でうたなければならぬ。時間もかかり、ついついおっくうになってしまう。

4) コンピュータ操作について (3名, 6名)

- ・パソコンが苦手だった私でも e-mail の交換ができ、自信がついた。
- ・コンピュータの使い方がわかった。

今後も電子メールを続けたいか

1 年次生	未修了生
97%	81%

電子メールは英語ライティング力の育成に役立つか

	1 年次生	未修了生
ほとんどない	0%	4%
少し	27%	32%
かなり	57%	46%
たいへん	17%	18%

どんな点で役に立つか

1 年生

- ・相手にわかりやすく伝えるためにはどういう文章にすればいいかを考える。
- ・授業でやるかたぐるしさがなく本当に自分の伝えたいことを自分の意思で書くので本当の力がつきやすい。
- ・自分の英語力を最大限に活用する力がつくと思う。
- ・週に何回か writing するんだから少しずつでもその力がつく。
- ・相手の表現からも英語を学べる。
- ・何度も辞書をひいて覚えることや英語を書く速度アップには役立つと思う。

- ・実用的な英語表現を知ることができる。

未修了生

- ・まちがえないように調べたりするし、決まり文句は何度も送るうちに覚えるから。
- ・相手にわかってもら文章をかくための勉強になる。
- ・英語のあいさつ、日常会話に必要な語句がわりと自然に身につく。
- ・自分が書きたいことを書けるので、使った言い回しをおぼえられる点。
- ・本当に使える英語を身につけることができるから（外国人との交換ゆえに、中途半端な英語じゃ通用しないから）。
- ・自分の言葉を英語にしたいという気持ちになり、辞書を引くのが面倒と思わない。

電子メールを速くスムーズに書くにはどんな力が必要か（1年生のみ回答）

- ・英語運用能力（20名）
自分のいいたいことを簡潔に英語で伝える力
英語を自分の頭の中ですばやく組み立てる力
スピーキング能力
- ・英語の語彙力（8名）
- ・キーボードを速く打つ力（8名）
- ・英語の口語表現力（4名）
- ・英語文法力（3名）
- ・情報や知識を十分もつこと（3名）

考察

ここでは、電子メール交換の経験を通して得たものと電子メール交換とライティング能力の関係について考察したい。

(1)電子メール交換の経験を通して得たもの

この点に関して、1年生と未修了生グループの回答は4つの面に集約できる：(1)異文化理解／交流ができた、(2)英語学習に役立った、(3)コミュニケーションの楽しさ／難しさを感じた、(4)コンピュータ操作や電子メールの送信の仕方がわかった。(1)については、1年生は、少なくとも二カ国のパートナーとメール交換を経験したためか、「異文化理解／交流ができた」と感じた学生は多かった。例えば、「異なる出身国の人の考え方や生活が知れる」や「外国の見ず知らずの人と知り合いになれた」などと学生は述べている。メールのやりとりを通して近況を知らせているうちに、自分とは違う相手の考えを知ったり、一度も会っていないにもかかわらず相手に親近感を抱いたりするのであろう。しかし、こうしたいわゆるバーチャルリアリティでの関係に不安を感じる学生もいないわけではない。「電子メール交換について不満があるか」の設問に対して、「相手の表情が分からないのでおそろしい」と答えた学生もいる。しかし、このような回答をした学生は数名であり、多くは、電子メールによるコミュニケーションを通して、「手も届かないような遠くにいる人と会話ができたことはすごく新鮮でよかった」、「外国の人とであっても、英語ならばコミュニケーションできるというのが新たな発見だったからです」などと、新しい体験につ

いて報告している。

電子メールによるコミュニケーションが英語による「おしゃべり」(または「チャット」)に近いものだという認識は1年生と未修了生のグループに共通してみられるが、その「おしゃべり」の難しさも学生は感じている。「おしゃべり」と言えども、コミュニケーションの相手に対して失礼な質問は避けるべきだとか、こちらが積極的にコミュニケーションしたいという態度を見せなければいけないと強く感じ、その気づかいを負担に感じる学生も中にはいる。しかし、そう感じていること自体実際のコミュニケーションを体験していることなのである。学生にとって電子メールの難しさは、やはり英語力とキーボード打ちが同時に必要とされているところから生じており、この二つにまだ自信がない学生にとって電子メールは負担が大きい。それにも関わらず、「今後も電子メールを続けたいか」に対して、両グループともに圧倒的多数の学生(1年生, 97%; 未修了, 81%)が「継続したい」と答えている。その理由の多くは上記に挙げた4つに集中するが、「楽しい」、「面白い」、「返事がもどってくるのはすごくうれしい」など情意面での回答も非常に多かった。

(2)電子メール交換とライティング能力の関係

「電子メール交換はライティングの育成に役立つか」という設問に対して、1年生では74%、未修了生では64%の学生が「かなり」または「たいへん」役に立つと回答している。それではどんな点で役立つと学生は捉えているのだろうか。第1点は、電子メール交換が実際のコミュニケーションであり、自己表現を繰り返しているうちに英語表現が増え、そして自分が「使った言い回しをおぼえられる」という点である。多くのライティングの授業では、教師が学生に作文の課題を与え、学生は求められた作文を書き、それを提出して評価を受ける。それに比べて、メール交換では相手に「自分の伝えたいことを自分の意思で書く」のである。この伝えたいという自発的な動機があるため、相手にわかるように工夫して考えたり、自分が知らない表現については自然と辞書を引いたりするが、それが面倒であると学生は感じない。さらに自然な自己表現と結び付いた語句や文は学習者の記憶の中に定着しやすい。第2点は、「英語を書く速度アップには役立つ」という点である。英語で表現する機会が増えれば増えるほど、語彙や文法の言語情報処理が速くなり、英文の組み立てが速くなる。もちろん数回のメール交換で書く速さが目に見えて変化する実感はないが、回数を重ねるに従い、英語で書くということに抵抗感がなくなり、いずれは「速く書く」ことが可能になるであろう。

最後に、第2点と関連し、電子メールを速くスムーズに書くために必要な能力について1年生グループに尋ねた。多くの学生(20名)が、スピーキング能力または英語を自分の頭の中ですばやく組み立てる能力を挙げている。スピーキングもライティングも言語運用能力を必要とする点では似ているが、スピーキングはライティングよりも短い時間で言語情報を処理し、発話を組み立て、相手に対応しなければならない。この点では、電子メールを書くことはスピーキングに近いが、書き言葉を使ってコミュニケーションする点ではやはりライティングである。電子メールは、結局、スピーキングとライティングの中間に位置すると考えるのが妥当であろう。電子メールを速くスムーズするためには、この二つの能力に共通している言語運用能力の育成が必要である。この能力は文法や語彙知識が基礎となるが、多くの学生が感じたように、これだけでは十分ではない。これらの知識がすばやく機能的に働き、英文を産出できる力、つまりは、英語で直接に表現できる力を高めることが必要である(Kobayashi & Rinnert, 1992)。英語ライティング力の育

成の点から考えると、電子メール交換はその運用能力を養う機会を与えてくれる効果的なアクティビティであると思われる。

まとめ

「大学生の英語学習に関する意識調査」(松浦・三浦, 1998)の中で、教養的教育科目として大学に求める英語の授業として「異文化理解に役立つような授業」、「英語でコミュニケーションができるような授業」への学生のニーズは1年生、2年生ともに非常に高いことが報告されている。さらに「インターネット・コンピュータ」を利用した授業に対しても学生の関心は高い。こうした実用的な英語授業を求める現代の学生に対して、この実践で試みた海外大学生との電子メール交換は、英語授業に導入可能なアクティビティであると提案したい。この導入によって、学生にコンピュータ操作の仕方を教えたり、相手校の教師とコーディネートしたり、普通の英語授業では必要とされない仕事が教師に求められるが、メール交換は学生の主体性を引き出し、個人のニーズに合わせた授業を可能にしてくれると私は考える。

注

1. 授業中さまざまなトラブルが生じたが、その都度、問題に対処してくださった総合科学部教務員の村上久恵さん、外国語教育研究センターの事務補佐員、木原啓子さん、黒川美砂さんに深く感謝したい。
2. Intercultural E-Mail Classroom Connections (IECC) はクラス単位で電子メール交換を希望する教師に有益な情報を提供している。私は IECC-HE (IECC-he-request@stolaf.edu) を利用した。このアドレスに“subscribe”のメッセージを送れば、「キーパル求む」の案内を自動的に送ってくれる。
3. 表2の学生数は、12月9日に授業に出席した学生に対して行ったアンケート調査の結果に基づく。最初は、相手校から38名の名簿を入手し、本校41名の学生とマッチングしたが、両方のクラスで受講をとりやめる学生が出たため、学生数が減少した。学生の定着の不安定さは、突然、パートナーがいなくなったなどメール交換に影響を与えている。現在では28名がメールを交換している。

参考文献

- Kobayashi, H. & Rinnert, C. (1992). Effects of first language on second language writing: Translation versus direct writing. *Language Learning*, 43, 183-215.
- 松浦伸和・三浦省吾 (1998). 大学生の英語学習に関する意識調査. 『広島外国語教育研究』(広島大学外国語教育研究センター) No.1, 17-32.
- Warschauer, Mark. (1995). *E-mail for English teachers*. Alexandria, VA: TESOL.

ABSTRACT

Writing for Communication:

– E-mail Exchanges with Overseas College Students –

The purpose of this paper is two-fold: first, to report a study of the experiment on Hiroshima University students' e-mail exchanges with overseas college students, and second, to report the results of a questionnaire survey administered to two classes of students (N=58) who have experienced with the e-mail exchanges. In the first report, the experiment was explained in details in terms of what preparations were necessary prior to the actual e-mail exchange including teaching computer literacy, informing students the purpose of e-mail exchange, seeking and choosing appropriate partner classes and matching keypals. Then the report shows the frequencies of actual e-mail exchanges which took place between Hiroshima University students and those in each of the four overseas institutions, as well as and the number of students which were involved in this exchange.

The second part of the paper reports the results of the questionnaire survey. The most significant finding is that almost all students perceive their e-mail exchange experience to be very positive, reporting that (1) they have learned about different cultures and people, (2) the experience was conducive to English learning, (3) e-mail exchange is a lot of fun, but somewhat difficult, and (4) they have learned how to operate a computer. The survey also shows that a great many students have a strong desire to do e-mail exchange with overseas students if they have another chance. Furthermore, a majority of students report that e-mail exchange helped their writing ability to improve; for example, because they want to convey their true feelings or ideas, they work hard to find appropriate expressions by looking into a dictionary. All these results suggest that e-mail exchange gives students a chance to increase cross-cultural awareness as well as a chance to improve English writing ability.